

北海道遺産
Hokkaido Heritage

北海道遺産・北見市指定文化財

ピアソン記念館

第130号

(隔月刊)

発行：2026. 9 .30

(令和8年9月30日)

発行人：中山 一夫（理事長） 編集人：伊藤 悟（副理事長）

NPO 法人ピアソン会事務局
(事務局長 伊藤 悟)
〒090-0036 北見市幸町7丁目4番28号
ピアソン記念館内Tel. FAX 0157-31-1215
午前 9:30 ~ 午後 4:30

e-mail / pierson@yacht.ocn.ne.jp

会報のバック
ナンバー等は、
左のQRコード
ホームページで
読むことができ
ます。

【写真】前左にティンホイッスル演奏の安井マリさん。右に、嶋本勇さん（ギター）。奥右に太田眞美さん、嶋本郁美さん、中川妙子さん。



安井マリ



第49回文化サロン de ピアソン

安井マリ 「アイリッシュ音楽の夕べ」 報告

9月21日曜日（祝日）、日本を代表するティンホイッスル奏者の安井マリさんと、道内で活躍するリコーダー奏者・ギターリストと「アイリッシュ音楽の夕べ」を5人編成で開催。40名定員の予約は9月初旬に満席となり、当日予約無しで来られた方には、毎回のことですが、会場の安全確保等の規則により、残念ながら定員以上の入館は遠慮していただきました。



5連休3日目の午後5時からのコンサートでした。普段アイリッシュ音楽という名前には馴染みが薄いかも知れませんが、日本では昔からアイルランドの音楽が愛唱歌として歌われていました。最近はそのに加え、映画などの影響によりアイリッシュダンスの旋律も大いに好まれるようになり、総称して「アイリッシュ音楽」と呼ばれるようになりました。今回のコンサートでも、「庭の千草」・「塙生の宿」などの演奏と全員での合唱。また、映画「タイタニック」の三等船室でのアイリッシュダンスの音楽、The Blarney Pilgrim など、体が自然と動き出す旋律など、アイリッシュ音楽の真髄に触れることができたコンサートでした。アンコールに込め、最後は軽快で親しみやすいダンスリズムのアイリッシュのポルカの演奏で終了しました。安井マリさん、嶋本さん、太田さん、中川さん、ありがとうございました。

第50回文化サロン de ピアソン

「北欧風クリスマスリース」講習会

- ◎ 開催日時：2026年11月29日(日)午前の部（10時～12時10名）・午後の部（13時～15時10名）
- ◎ 開催場所：ピアソン記念館2階
- ◎ 講師：増井五夜子氏ほかピアソン会ハーブ部会員
- ◎ 予約チケット：材料費として1,500円。（11月1日よりピアソン会にて予約受付、電話可）。
- ◎ 問い合わせ：NPO 法人ピアソン会（電話 0157-31-1215）ピアソン記念館 ☎ 23-2546



素敵な来館者たち！

①

昨年に引き続き、道立北見北斗高校一年生全6学級231名がピアソン記念館を訪れました。同高は、道立野付牛中学校として、1923(大正12)年に設立された学校です。また、ピアソン夫妻は、その中学校で英語を教えたり、生徒のためのピアソン寮を建設し、お金のない生徒でも勉強できる環境を調えていました。そのようなことから、中学校初代校長はその寮の舎監を務め協力していました。

今回の来訪は、郷土の歴史を学ぶ「歴史総合学習」としての来館です。3日間毎日2学級ずつの訪問でしたが、当記念館案内役としても、若者のエネルギーを感じ取る楽しい時間でもありました。6学級のうち4学級の記念写真撮影ができました。



ようこそ！ピアソン邸へ

【写真右】ハルニレのエネルギーを吸収に、樹木に集まる男子生徒たち。



【写真説明】各クラスの生徒達へ、「会報用の記念写真を！」とお願いますと、機敏な動作で集合し協力してくれました。さすがにピアソン所縁の生徒達です。初日来館の2クラス、記念写真残せなくてごめんなさい。



素敵な来館者たち！

②

8月2日曜日、休日である。足尾鉍毒研究者の人たちが記念館に来ています」と電話。突然の呼び出しで記念館に顔を出す。栃木からの訪問者。下掲載「写真展」の関係者で「小口一郎研究会」代表の篠崎清次氏、また「田中正造・足尾鉍山鉍毒事件」研究者の赤上剛氏の一行であった。来館目的は、栃木出身で強制移住して来た、ピアソン邸管理人を務めた神原信一氏の親族を訪ねての来館であったが、一昨年すでに亡くなっている事を伝えると落胆されていたが、十二年前に小口一郎の木版画「鉍毒に追われて」(明治44年から翌年にかけて北海道サロマ原野に強制移住した作品)の記念館で

素敵な来館者たち！

③

8月23日、予約なしの群馬からの団体21名の来館があった。話を聞くと、「足尾鉍毒研究会」の一行で、佐呂間町で開催されている足尾鉍毒事件「サロマベツ原野移住と帰郷」の写真展への参加であるという。当初、「何故足尾鉍毒事件が群馬県と？」と思ったが、渡良瀬川流域に被害の及んだ鉍毒事件であることを思

の上映を伝え、その映画会提案者が移住者家族の娘、故小林たつえさんであったこと、更に家族の移住記録の本も書いていたのでその本も寄贈する。歓談後、一行は会場の佐呂間町へと向かう。



い出し納得できた。話を聞くと、現地では年々高齢化が進み解散する団体が増えていると語っていた。写真左は田中正造の血縁者。

(名刺交換を忘れていました)



素敵な来館者たち！ ④

毎年、この時期に「オホーツク勤医協友の会」の皆さんが記念館に来られます。健康増進の行事で、各自徒歩で前庭に集合し、太陽の日差しを浴びながらストレッチ体操などをして、17名（内子供1名）の入館です。

今回記念館解説では、このピアソン邸が建つ一九一四（大正3）年、この地の大事件について話しました。『その年の5月。街の中心街から出た火災で、三百余戸の商店・事務所・旅館等が焼失したのです。ピアソン夫妻は予定を繰り上げ、すぐに旭川から来て、他の宗教団体と協力し、炊出しや、衣類、寝具の調達など被災民のために懸命に働いたことが北見での最初の活動でした。』助け合う町の歴史を知った友の会メンバーは、何処となくホットしたよう！



素敵な来館者たち！ ⑤

9月22日、広島県から子供5名と大人9名の教会内キッズスクールの団体が来館しました。予約なしの団体でしたが、ピアソン記念館概略説明と、人権活動などを含め、特にピアソン夫妻は幼児教育の大切さを、この北海道内で広めた人であることなどを話しました。

最近の教会では、幼児教育のための幼稚園などの他にも、英語教室や算数教室なども開いているようで少々びっくりしましたが、現代社会では必要なことなのです。帰りには、ピアソン公園で走り回っていました。

【写真右】広島県から5連休を利用して念願のピアソン記念館へ。

【写真上】友の会のメンバー、健康指導のスタッフと。



啓「ピアソン学事始め」 ②6

この「ピアソン学事始め」は、22年前に街の情報誌に書かれたものですが、少し手を加え年号なども修正し改稿として連載しています。

ピアソン夫妻の「北見の国」旅行 伊藤 悟

一九一〇（明治43）年六月十日に、ピアソン夫妻は小樽から船で「北見国」を目指します。当時北海道は11の国に別れ、利尻礼文から知床半島までのオホーツク海地域を「北見国」と呼んでいました。そしてこの地方を目指す旅人は、小樽からの船を利用するのが普通でした。これは北海道の命令航路で、「郵船西廻定期航路」と呼ばれ、毎月五回程度往復していました。

この旅行は約二週間に及ぶもので、雄武、湧別、学田（遠軽）、佐呂間、留辺蘂、野付牛（北見）、美幌、陸別を馬を利用し、陸別からは建設中の鉄道、後の池北線に乗って池田まで行き、さらに汽車で旭川へと帰ったのです。この旅行が、以後ピアソン夫妻が野付牛へ移住の意志を固める旅行になったのか、それは定かではありませんが、夫人の旅行記「六月の北見路」を読むと、この旅で夫妻の新しい目標が定まったような印象を、私には感じることが出来ます。

一九一二（明治45）年五月にピアソンは一度アメリカに戻ります。これは、母校プリンスストン大学から博士号授与があったからです。帰りは、英国・ヨーロッパ・ロシア経由で一九一三（大正二）年秋に日本へ戻ります。この頃には夫妻は、「最後の伝道地を野付牛で」と決めていたのではないかと思います。一九一（明治44）年に亡くなった坂本直寛牧師所縁の地「北光社」開拓民の残る野付牛（現北見）を、日本での最後の活動拠点としたのです。二人の「絆」を感じざるを得ません。



【写真説明】：ピアソン夫妻が小樽から乗った船の釧路丸。明治36年新造。
67.06 × 8.84 × 6.92 m. 1,076GT、107HP、12.96KT。
1944年11月に九州の枕崎で沈没。

ピアソンブックレット No. 7

写真集 改訂版「ピアソン夫妻の足跡」

- ◎A 5版 本文 98 ページ 全 102 ページ
- ◎表紙 カラー印刷
- ◎本文 4 頁カラー 94 頁グレー印刷
- (1) 使用写真 83 点
- (2) 製作部数 500 部
- (3) 頒布価格 1,000 円
- ※連絡先 ピアソン記念館 (☎ 0157-31-1215) 郵送可 (送料 210 円)
- ・出版/NPO 法人 ピアソン会
- ・編纂/伊藤 悟
- ・編集/北見・オホーツク地域出版協会
- ・協力/玉置 義弘 吉田 邦子
- ◎NPO 法人 ピアソン会

お待ちせう！
改訂版 写真集



「唐笠何蝶記念室」から (3)

戦後、唐笠医師は北見医療の発展と、北見地域文化の発展に寄与します。

当時の北見の文芸界を見ますと、俳諧誌「阿寒」をはじめ、文芸同人誌「私たち」など、北海道を代表する活動を見ることができます。

唐笠医師は、号を何蝶と云い、ホトギス派の有名な俳人で、戦後はこの建物で「句会」が催されたり、また昭和二十一年より十六年間、「阿寒」と題する俳誌を発行、その名は全国に知られるようになります。北見のみならず北海道文化活動向上に多大な貢献（北海道文化奨励賞受賞）をされました。

人ピアソン会は、唐笠学氏のピアソン邸保存の功績と文化活動の業績を称え「唐笠何蝶記念室」を開設しましたが、その後二〇〇一年七月、この記念館の庭園に、ホトギス派俳句創作活動で著名な唐笠氏長女、嶋田摩耶子ご夫妻の協力により、唐笠何蝶、嶋田一歩、嶋田摩耶子、三者の作品による「何蝶親子句碑」を建立しています。

一九五八年、唐笠医師は札幌に移されましたが、この建物が残るようにと、北海道に建物と土地を寄贈しました。氏の意思を尊重した北海道は、ここを児童相談所施設として十余年間使用することとなりました。その後北見市に移管され、唐笠氏の思いが実を結びピアソン記念館として開館し利用されるようになります。唐笠医師が昭和14年にピアソン邸を取得し、昭和27年までピアソン邸を守る強い意志がなければ、おそらくこのピアソン記念館は存在していなかったと思います。



第1回の講座を終えて (1)

8月の3日、市内の子供達の夏休みに、社会教育施設である「ピアソン記念館」で、子供達を対象とした講座がないのは如何なものか? と思い、急遽「子ども寺子屋」の企画を計画し開催。

急な企画でもあり受講者が集まるのか不安でしたが子供10名、大人9名の参加がありました。



今回は50分講座で、北見地区で哺乳動物(人間も含め)である生き物の歴史全体の流れを、すなわち先史時代全般を、地域にある博物館施設を通して識ってもらえるように組み立てたつもりでしたが、博物館の仕事と離れて約三十年も経つので、不安なスタートでした。

無論、最初は文化センター博物館展示の「デスマスチルス」から北見の歴史は始まります。発見した人物が、当時北見の中学一年生であったこと。デスマスチルス生息時代の北海道地形は、現在では考えられない地形であったこと。それ以降、地形の変遷と大陸との関係。哺乳動物の進化。時代は進みいよいよ人類の登場とその遺跡について。

「ところ遺跡の森」先史遺跡の集大成と言える貴重な文化財についての説明。縄文時代・続縄文時代・擦文時代・アイヌ文化の時代。これらの時代を一つぶさに識ることのできる貴重な博物館が常呂地域にあることを識ってもらおう。特に国指定の重要文化財をこの夏休み期間中に必ず見て欲しいと伝える。

そしていよいよこの地域で先史時代の終わりを告げるのが「松浦武四郎」の「戊午日誌」である。ここで、時間切れとなりました。

編集後記

「アイリッシュ音楽の調べ」コンサートも無事終わりました。楽しいひと時でした。でもこのような行事を、責任を持って事故もなく終わらせるには、多大な心労を伴います。上手くいって当たり前ですが、素人集団事業でも、事故の責任や何か問題が発生した時には、「素人集団ですから」などという言い訳は通用しません。この狭い記念館での催し入館限度は40名以内が限界と考えています。

ピアソン記念館の「お化粧直し」を考えていますが、このペンキを塗る作業、なかなか大変のようです。資金集めには相当の労力がかかることがわかりました。

地域記念カード、北見すごろく、などなど、他の団体との協力体制を確立したいと考えています。

(副理事長兼事務局長) 伊藤 悟



緑化木生産販売・各種緑化資材・造園土木

(有)武田花光園

お花のプロが親切に教えます

オホーツク 海病院	スキー場 タンノホ
武田	看護大学
	セブンイレブン 文京町
北見工大	

北見市小泉 858番地2
☎ 0157-25-9257

これから秋まで、お花を植えて楽しんでください。苗がなくても大丈夫です。直売所直通 090-8904-9257